

# 長崎原爆被爆者A氏が被爆体験を語る意味

吉田恵理子・永峯卓哉

Significance of Mr.A telling about his Nagasaki Atomic Bomb Experience

Eriko YOSHIDA and Takuya NAGAMINE

## 要 約

本研究は、長崎原爆被爆高齢者である A 氏はなぜ被爆体験を語ったのか、A 氏が被爆体験を語る意味について明らかにすることを目的とした。長崎で原爆被爆体験のある高齢者 A 氏、86 歳を研究参加者とした。A 氏に対し、半構造化面接を行い、内容分析を行った。

A 氏が語った長崎原爆の被爆体験を語る意味は、【社会情勢への危機感】【愛と平和の希求】【次世代への伝承役割の自覚】【自らの人生への意味づけ】の 4 つで構成された。A 氏は、戦争や犯罪、自殺といった現代社会が抱える様々な問題に対し、【社会情勢への危機感】を覚え、その状況を生み出しているのは人と人の関係性の欠如が理由であると考え【愛と平和の希求】をしていた。そして、体験したからこそ語れるのだという【次世代への伝承役割の自覚】や、語りを聞いてもらうこと、自分の体験を分かってもらえることに【自らの人生への意味づけ】をすることができたことが A 氏が被爆体験を語る意味の構造である。

キーワード：語り、意味、被爆体験、長崎原爆被爆高齢者

---

所属：

長崎県立大学看護栄養学部看護学科

Department of Nursing Science, Faculty of Nursing and Nutrition, University of Nagasaki, Siebold

## はじめに

本稿は、長崎原爆被爆高齢者である A 氏が体験を語る意味について明らかにすることを目的とした。

太平洋戦争末期の1945年8月6日に広島、9日に長崎に原子爆弾（以下、原爆）が投下され、多くの人が犠牲となった。2023年8月9日、長崎は78年目の原爆の日を迎えた。被爆者手帳を持つ被爆者は、11万3649人、平均年齢は85.01歳（2023年3月末現在）<sup>1)</sup>となり高齢化が進み被爆による経験を語る事ができる体験者も減少している。

原爆の影響については、医学的視点から、原爆による被ばくとがんの関連、被爆者の健康状態、心理状態について明らかにされている<sup>2)~8)</sup>。また、社会学的視点からの原爆被爆者についての研究では、原爆被爆者の被爆体験、語りの伝承、平和教育への示唆が得られている<sup>9)~20)</sup>。

原爆被爆者にとっての語りについて田村は、歴史上は原爆投下に関する社会的・歴史的出来事について述べたものであるとしている。心理学的には、原爆の記憶を再構築し新たな自己を形成するという個々の被爆者の心的過程の結果である。社会学的には、自分の存在意義に関わる語りであり、当人の社会行動の前提となるものである<sup>21)</sup>と述べている。また植田は、「ほんとうに苦しいことについてひとは話しにくいものだ。なかなか話したくないものだ。忘れてしまいたいということもある。どのように語ってもおいつかないという想いもあるだろう<sup>22)</sup>」と、語ることの難しさについて述べている。

このように様々な研究が取り組まれているが、未だ被爆高齢者自身の語ることの体験から、意味を探究した研究は行われていない。

## 用語の定義

意味：長崎原爆被爆高齢者 A 氏の頭の中に表される感覚と定義した。

長崎原爆被爆者：長崎に投下された原爆による被爆者と定義した。

## 研究方法

### 1. 研究参加者

長崎で原爆被爆体験のある高齢者 A 氏を研究参加者とした。A 氏と筆者は、2018年から、長崎市で開催される平和に関する講演会や NPO 活動で面識があり、A 氏は2022年5月から2023年2月に筆者が行っている被爆者の体験に関する研究に参加し、被爆体験を語った経緯がある。また、西日本新聞、朝日新聞の取材を受け、被爆体験について語った経験もあった。

### 2. 調査期間

2022年9月から2023年4月

### 3. データ収集方法

半構造化面接を実施した。面接では、これまで被爆者の体験の研究や新聞の取材に参加し、被爆体験を語ったことについての印象、感じ、感情について自由に語ってもらった。面接場所は、A 氏の自宅とした。

面接内容は A 氏の許可を得て、IC レコーダに録音した。全体を通じ3回の面接を実施した。

### 4. 分析方法

参加者の語りは、参加者の語りをそのまま書き写す「対話引用方式」を用いて、逐語録を作成した。分析は、Berelson<sup>23)</sup>の内容分析の手法を用いた。具体的には、逐語録を繰り返し熟読し、長崎原爆被爆高齢者である A 氏が体験を語る意味について語った語りを抜き出し、コードとした。次に、コードを内容の類似性・相違性を検討しながらカテゴリを形成し、形成したカテゴリに対し、内容を反映する命名を行った。

分析の過程では、共同研究者と繰り返し検討し、3回の面接終了後の最終逐語録、分析結果（カテゴリ形成）の時点で研究参加者に内容の確認を行い、加筆、修正を行った。

### 5. 倫理的配慮

研究参加者に、研究目的、研究内容、インタビュー内容、方法、自由意思による研究への参加と辞退、途中辞退による不利益はないこと、研究成果の公表について文書と口頭で説明し、署名による同意を得た。また、作成した逐語録および形成されたカテゴリは、参加者が表現した感覚とのズレがないか内容の確認を行った。

A氏のプロフィール及び地名や施設名などの固有名詞は、A氏の承諾を得てそのまま記載することを原則としたが、個人情報保護の観点から、筆者が望ましくないと判断した場合は、アルファベット一文字で表記した<sup>24)</sup>。

面接は、参加者のプライバシーや体調、新型コロナウイルス感染対策を十分に配慮したうえで実施した。

## 結果

### 1. 研究参加者の概要

A氏、86歳（2022年3月時点）、男性。被爆当時9歳。面接は、2020年11月～2021年12月に、A氏の自宅で行った。3回の面接総時間は、4時間12分であった。

A氏は、3人きょうだい（兄、A氏、弟）の次男としてa県で生まれる。自宅は爆心地近くで菓子店を営んでいた。母親は、結核を患っており爆心地近くの病院に入院していたが原爆で死亡した。

爆心地から1.4キロの畑の納屋のそばで被爆。弟は、折れた柱が腹に突き刺さり、死亡した。

父が再婚したため親戚に引き取られる。その後、東京の高校に進学。a県にもどり教員となる。

被爆体験は、ずっと語ってこなかったが、新聞の取材をきっかけに語りを公表するようになる。

長崎原爆の語り部としての活動依頼が幾度となくあったが、断ってきた。

妻を数年前に亡くし、現在独居。

### 2. A氏の被爆体験

被爆当時は、爆心地近くの教会の側に住んでいた。8月9日は、早朝、父親にお世話になっていた韓国人の知人が「きょうは危ない。アメリカ来る。逃げろ、逃げろ」と大八車を押してきたので、祖母の住む1.4キロ離れた畑に避難した。

じゃがいもを畑で炊いていると、弟が、「兄ちゃん、危ない。B29だ」って。グーッとB29が来た。「あそこだ」と思って。そしたら、次にグラマーが来た、ガンンって。その時に僕は弟の手を引っ張って、「行くぞ」と叫んで、逃げようとしたんです。その時には、上の畑まで飛ばされて畑の中に落ちました。気が付いて弟を見ると、折れた柱が弟の腹に突き刺さり臓器があふれていた。

それを私は半日押さえて、臓器を入れてを繰り返していた。死にゃいいのに、死なないんですよ。痛いとも言わない。私は小さな手で大腸を握って、一生懸命入れようとするけれども、入ったと思えばまたぱっと、入ったと思えばまたぱあっと飛び出てくるんですよ。そんな中、弟がいった言葉は今でも忘れません。「兄ちゃん、ごめんね」「何か?」「兄ちゃんのお金を1円かっぱった」ってこう言うんです。傷口を兄と押さえ、親父が近くの病院に運んだが、昼に爆弾が落ちて、死んだのが6時頃だったかな。その日の夕方息を引き取った。6歳だった」。

原爆の時、家が上がってくる石垣に死体がベターとくっついてた。道には人が死んでいて。僕が逃げよった足をぱっとつかまれて、「僕、水を飲ましてくれ。小便でいいから飲ましてくれ」って、抱き付いて、足を。僕は振り切って行ったんですけど、帰ってくる時は死んでおられました。その時「ああ、小便でも飲ましておきゃあ良かった」とすごい感覚で残っている。原爆の後、そこを通るたびに、浮かんできて、特に夜は怖くって怖くって、猫の目が光っただけで腰ぬかしそうになるくらい怖かった。今でもあの光景は忘れられない。そんなことを知っているから、立ち小便なんてことは絶対にできない。

### 3. A氏が被爆体験を語る意味

分析の結果、A氏が被爆体験を語る意味は、

【社会情勢への危機感】【愛と平和の希求】【次世代への伝承役割の自覚】【自らの人生への意味づけ】の4つのカテゴリから形成された。

以下それぞれのカテゴリごとに特徴的な語りの内容を示す。

#### 1) 【社会情勢への危機感】

A氏が語った、【社会情勢への危機感】に関連する特徴的な語りは、「ここ数年コロナの感染拡大で人と人とのつながりが希薄になっている。戦争もそうだし、新聞やニュースで絶えない事件もほとんどが人との関係がなくなっていくことによって起こっている」「原爆が落ちない中でも、毎日親を殺したとか、あんな見ると悲しいよ。今日もニュースであっていた。16歳の少年がお父さんを殺したり、毎日自殺が出てくるでしょう。人殺しが出てくる」「戦争だけじゃない、この世の中は苦しみに満ちている。もっと本当の幸福についてみんなが考えなくてはなら

ないのに、金や名誉にしがみついて誰もそれをしようとしない」「核兵器は絶対に使っていけない物だ。やめなさい! って、いくら言ってもみんな自分の利益を正義にして(理由をつけ)、話し合いで解決できないところまで来ている。ウクライナがどうなるか分かりませんが、あそこに原爆が落ちたらもう終わりですね。落とした国も滅びます。でも、それが起こるのは、明日かもしれないんです」などであった。

## 2) 【愛と平和の希求】

A氏が語った、【愛と平和の希求】に関連する特徴的な語りは、「平和運動ってね、彼らがどれだけ原爆のことを勉強してやってるのか、私は疑問にあるところもたくさんあるんですけども、確かに平和運動とは続けないといけない。もう二度とこんな原爆があってははいけません。でも、その根本にある、愛がないといくら平和、平和って言っても、運動をしてもダメなんです」「愛とかっていうと、あんたはキリスト教だから、そういうんだと笑う人が多いけど、人とのつながりは愛がないとうまくいかないんです」「色々な問題や戦争が起こるのも、結局は、関係性の問題、愛がないからだけど、それをみんなわからないんだろうね」「私に残された時間は、あと少しだろうけど、どうか、私が死んだ先も幸せな世の中であることを願わずにはいられない。孫や子どもが私のような思いをせずに、どうかそんな世界であってほしいと思っている」「私は、これまでの人生で、本当に亡くなったかあちゃん(妻)にも迷惑ばかりかけてきた。そのつぐないはもう遅い(妻が他界したので)けど、今は、小さなことでも感謝しながら、食べるとかこうして、人が訪ねて私の話を聴いてくれるとか、そういうことに感謝しながら過ごす毎日であってほしいとお祈りしています」などであった。

## 3) 【次世代への伝承役割の自覚】

A氏が語った、【次世代への伝承役割の自覚】に関連する特徴的な語りは、「私が高校2年の時だったか、原爆記念日で坊様が説教されたんです。その中に『8月9日に、私がa病院の庭の奥のを通ったら、桜の木の下で小さな少年がおなかの割れた弟を抱っこして、一生懸命、一生懸命、『頑張れ、頑張れ』と言っていた。今でも涙があふれます」と説教したんです。その時に、『ああ、俺のことを知ってる人がいたんだ』と。その話を自分で聞いたのがきっかけです。少しでも原

爆のことを話すようになったのは。わかってもらえなくてもこの体験は次に伝えないと…と」「被爆者がどんどん高齢化してきて、色んなところで、被爆体験を伝えましょうっていう平和活動があっているけど、なんか美化されるっていうか、パフォーマンスっていうか。原爆を知っている人がだんだん減っているから、2世の人や小さい子どもだったから、当時の記憶はないけど…って言う人が沢山話している。それは悪いことではないけど、やっぱり、あの時の体験はそんな生易しいもんじゃないっていうのもあって。ああ、苦しくてもそれを体験した人が伝えないといけないんだという思いがある」「親が子どもに伝えるように、教師や生徒に伝えるように、それを伝えていかないといけないのかなという思いはある。私が教師だったからよけいそう思うのかもしれないですね」などであった。

## 4) 【自らの人生への意味づけ】

A氏が語った、【自らの人生への意味づけ】に関連する特徴的な語りは、「自分のことを分かってくれる人がいる。それは体験を話す中でとても大切です。聴いてくれる人がいるから話せる。話している中でも、ああ、こうだから自分は生かされて来たんだなって自分の人生の意味を考える」「ほんとに辛い体験なんだけどね。辛いと言ってもわかってもらえない体験なんだけど、死んだ弟のことを話すと、弟が自分の前に、『兄ちゃん』って現れてくる。ああ、弟はああやって死んだけど、自分が生かされてきたことにはどんな意味があったんだろうって、何十年もたって私もこんな年になったから改めて考えるんだろうな」などであった。

## 4. 被爆体験を積極的に語らなかった理由

A氏の語りでは、これまで被爆体験を積極的に語ってこなかった理由についても語られた。

被爆体験を積極的に語らなかった理由について、A氏には被爆者の苦しみは、体験していない他者にはわからないという思いがあった。

「(原爆で被爆した) 経験はあるから、話ができるけど、しなかった」「誰が信じるか。こんなひどい、人間が魚を焼かれたように皮と肉になって、その姿を誰がわかるか。その下に焼けた人の顔を自分は分かってても人は分からないだろう。血管が見えてるんですから、みんな。それをどんなふうに説明するのか、簡単には言葉にでき

ないですよ」「教員の時に原爆の話を生徒にもしてくれと言われたけれども、絶対話すことはなかったです。今でもあんまり原爆の話、しませんね」「体験した人にしか、本当の残酷さや辛さはわからない」「原爆の話したら、何か同情を買ってような気がするんです。だから話ほしない」

「弟のあの姿を見たら、本当に人には言えない。僕は臓わたを、弟が死ぬまで抱えて…それもあったからこそ、僕は原爆の話をする人ができなかった。弟が1人で苦しんだ後、死んだからね。そんな話をしても、『人間、臓わたの割れてるのを抱えて何時間も、子どもがそんなことできるもんか』しか思わんです、みんな。だから、しない」「弟のことは、私の心の中では絶対に消えないですね。弟の墓に行ったら、『ごめんな、兄ちゃんだけ生きて。おまえは俺の目の前で死んだけど、兄ちゃんだけ生きて、ごめんな』ってやっぱり会話になって出てくるんです。それは、弟と私だけの会話で、それを話してもだれもわからないことなんです」「いつも、原爆の話をするときには、話したくないなと思う。言葉にするのは本当に難しい。黒こげの遺体がありましたって言っても、あなた（インタビュアー）の思うものと違うだろうし、あの時の何とも言えない感覚は、言葉では伝えきれない。それをわかってももらえるとも思っていない」。

## 考察

長崎原爆被爆高齢者である A 氏が被爆体験を語る意味は、【社会情勢への危機感】【愛と平和の希求】【次世代への伝承役割の自覚】【自らの人生への意味づけ】であった。

元教員であった A 氏は、戦争や犯罪、自殺といった現代社会が抱える様々な問題に対し、【社会情勢への危機感】を覚え、その状況を生み出しているのは人と人の関係性の欠如が理由であり、平和だけ追い求めても駄目だと考え【愛と平和の希求】をしていた。そして、被爆体験をしたからこそ語れるのだという【次世代への伝承役割の自覚】や、語りを聴いてもらうこと、自分の体験を分かってもらえることに【自らの人生への意味づけ】をすることが、A 氏が被爆体験を語る意味の構造である。

被爆から 78 年を迎え、被爆者の高齢化が進む中、被曝を実際に体験した高齢者の語りは、被

爆体験の伝達・継承という視点で位置づけられている。つまり、原爆に被爆した体験は、戦後の日本社会のなかで、『反核・平和』理念と結び付けられながら記憶されてきた<sup>25)</sup>のである。A 氏自身も、被爆体験を語る意味を【次世代への伝承役割の自覚】と伝達・伝承の意味があると捉えていた。しかし、このように被爆体験の語りを自他ともに伝達・伝承と位置付けることこそが、これまで A 氏が被爆体験を語らなかった（あるいは、語れなかった）理由に結びついているのではないだろうか。なぜなら、「語ることは他者（あるいはオーディエンス）の存在を想定した相互行為的な営みである。（中略）他者が存在しなければ、そもそも語るという行為は成立しない。そして、そのような他者の存在を想定して語ることは、自己(self)あるいはアイデンティティ(identity)を構築する営みでもある」<sup>26)</sup>からである。しかし、辛い被爆体験を語っても、他者にはわかってもらえないという思いが、語ることを躊躇する原因となり、語りの意味を自らが構築する妨げとなるからである。語らなければ、意味を見いだすことはできない。また、体験を語る一聴くということが相互行為的であるということは、コミュニケーションをとるということである。一般にコミュニケーションといえは情報を収集し、あるいは伝えるコミュニケーションを意味するが、そこでは正確で迅速な情報の収集と伝達が目的となる<sup>27)</sup>。しかし、語り手の語りを促し、語り手が語りに意味を見いだすためには援助としてのコミュニケーションが必要である。それが援助的コミュニケーションである。援助的コミュニケーションとは、情報の収集や伝達を目的とするのではなく、コミュニケーションをとることそのことで相手の苦しみを和らげ、満足・安心・信頼を得るコミュニケーションのことで、目的は情報ではなく援助である<sup>28)</sup>。

また、【自らの人生への意味づけ】も A 氏が被爆体験を語る意味であった。高橋は、ある個人が本当に思ってきたことを語り終えて、それが真摯に聞かれたとき、人はどこか自分の人生そのものがねぎらわれた感覚を持つのではないだろうか<sup>29)</sup>と述べている。A 氏が語った「自分のことを分かってくれる人がいる。それは体験を話す中でとても大切です。聴いてくれる人がいるから話せる。話している中でも、ああ、こうだから自分は生かされて来たんだなって自分の

人生の意味を考える」も、語ることで、自己またはアイデンティティの構築とかかわってくる点である。つまり、自分の過去の経験（出来事）を、意味あるものとしてそれぞれを相互に関連づけ、そしてそれらの経験を 時間的に一定の順序をもって配列すること（時間的構造化）によって、自己やアイデンティティの統一性や一貫性を感じることが可能になる<sup>30)</sup>のである。

## 研究の限界と課題

本研究は、長崎原爆被爆高齢者である A 氏が被爆体験を語る意味について明らかにしたものであり、今後、原爆被爆者の語りを支援するうえで、意義ある研究である。しかし、これまで語ってこなかった体験をなぜ A 氏が語るに至り、意味を見出したのか、A 氏の体験のプロセスを明らかにできていない。体験をただ聴くだけでなく、語りの中でその意味を見だし、語ることが援助につながるような面接を行うことが課題である。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、コロナ禍の状況のなか研究を快く受け入れ、貴重な時間を割いてご自身の体験をお話いただいた A 氏に心からお礼申し上げます。

## 利益相反

本研究に関し、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 引用文献

- 厚生労働省：被爆者数・平均年齢,  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_26531.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_26531.html) (参照 2024-1-5)
- Fujimaru Kingo, Sugiyama Aya, Akita Tomoyuki et al (2021) Screening for M-proteinemia consisting of monoclonal gammopathy of undetermined significance and multiple myeloma for 30 years among atomic bomb survivors in Hiroshima, *International Journal of Hematology*, 113 (4) ,576-585.
- 神谷研二 (2021). 広島の実験を福島へ、放射線発がんリスクと小児甲状腺がん, *日本小児血液・がん学会雑誌*, 57 (5) ,329-340.
- 三根真理子, 横田賢一, 河野友子 (2020). 原爆被爆者定期健診の現状, *長崎医学会雑誌*, 95, 239-245.
- 縮輪哲生, 相川忠臣, 鳥山史他 (2018). 長崎原爆被爆者の被ばくによる日光角化症の発症について, *長崎医学会雑誌*, 93, 355-360.
- 近藤久義, 横田賢一, 三根真理子他 (2018). 長崎市原爆被爆者における既往症有病率と距離との関連, *長崎医学会雑誌*, 93, 317-320.
- 山下俊一 (2017). 放射線と健康影響, *臨床環境医学*, 26 (1) ,1-6.
- 一ノ瀬仁志, 中根秀之, 木下裕久 (2006). 長崎原爆体験者の心身の健康に関する調査研究, *長崎医学会雑誌*, 81, 222-225.
- Robert Jay Lifton (著), 湯浅信之, 越智道雄, 松田誠思 (翻訳) (1971). 死の内の生命—ヒロシマの生存者, 朝日新聞社, 東京.
- 石田忠：反原爆 (1973). 長崎被爆者の生活史, 未来社, 東京.
- 濱谷正晴 (2005). 原爆体験—六七四四人・死と生の証言, 岩波書店, 東京.
- 八木良広 (2007). 体験者と非体験者との境界線—原爆被害者研究を事例に, *哲学*, 117, 37-67.
- 八木良広 (2012). :被爆者と対話すること—原爆問題や被爆者の生に関する『新たな語り』の生成に向けて, *日本オーラル・ヒストリー研究*, 8, 63-69.
- 高山真 (2013). 長崎原爆被災の記憶に関する社会学的研究, *慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要*, 76, 149-151.
- 根本雅也 (2015). 証言者になること—広島における原爆証言者の証言活動のメカニズム, *日本オーラル・ヒストリー研究*, 11, 173-192.
- 高山真 (2018). 生存者が体験を語る意味—長崎被爆者とのライフストーリー・インタビューから—, *三田社会学*, 23, 3-20.
- 田村直子 (2018). 歴史の証人の語りにおける共感をよぶ力について—被爆者証言の分析を通して, *言語文化教育研究*, 16, 63-83.
- 横田賢一 (2018). 被爆者の語りを類型化する試み, *長崎医学会雑誌*, 93, 272-277.

- 19) 橋場紀子(2022). 韓国人被爆者の「語り」から見た「被爆体験」の特徴, 多文化社会研究, 8, 205-226.
- 20) 渡壁 晃(2009). 〈原爆〉の記憶の継承における「当事者」, KG 社会学批評, 8, 27-37.
- 21) 同掲 17), 63.
- 22) 植田正浩, 鷺田清一(2000). まなざしの記憶-だれかの傍らで, TBS ブリタニカ, 142, 東京.
- 23) Berelson, B.(著), 稲葉三千男, 金圭煥(訳)(1957). 内容分析, 48-70, みすず書房, 東京.
- 24) 吉田恵理子(2022). がんと共に生きる長崎原爆被爆高齢者の健康観- ライフストーリー・インタビューから -, 長崎県立大学看護栄養学部紀要, 20, 75-81.
- 25) 石田忠: 反原爆(1973). 長崎被爆者の生活史, 未來社, 東京.
- 26) 藤本愉(2003). 語り研究における「共同性」の検討, 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 90, 43-69.
- 27) 村田久行編著(2023): 苦しみを和らげる認知症ケア, 115, 川島書店, 東京.
- 28) 同掲 27).
- 29) 高橋在也(2014). 人間にとっての〈語り〉の根源性-年を重ねた者と〈語り〉の場の生成-, 総合人間学, 8, 251-289.
- 30) 同掲 26)